

八雲町

7325 高井 友以佳

1. 概要と歴史

1.1 名前の由来

八雲町は以前はアイヌ語で「ユウラッペツ」(温泉が下る川)と呼ばれていた。しかし明治14年に旧尾張藩主の徳川慶勝卿が、豊かで平和な理想郷建設を願って、古事記所載の「八雲立つ 出雲八重垣妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」を引いて「八雲」と名付けた。また、日本で唯一、太平洋と日本海を持つ町であることから、「二海郡」という新たな郡名が付けられた。

1.2 概要

八雲町は渡島山系をはさんで、西は遊楽部川、落部川、野田追川が流れ、東は相沼内川、見市川が流れており、農業・漁業ともに恵まれた立地となっている。また、道内随一の酪農郷でもある。

八雲町は、自然を守り、さらに美しく整え、人々の安らぎの場になるように、八雲 CI「自然美術館 八雲」をキャッチフレーズに街づくりを進めている。八雲町のシンボルマークは(図2)八雲町の地形をモチーフにし、草地や山の緑、明るく美しい街、そして澄んだ空により「自然美術館 八雲」のイメージを表現している。また、町章(図1)は八雲町の「八」と二つの海の「波頭」をモチーフに表現し、中央の小円は、太陽を表し、未来に向かって輝かしい発展をする「八雲町」の明るく元気な姿を力強くアピールしている。

図 1 八雲町シンボルマーク



出典：北海道八雲町 HP

図 2 八雲町町章



出典：北海道八雲町 HP

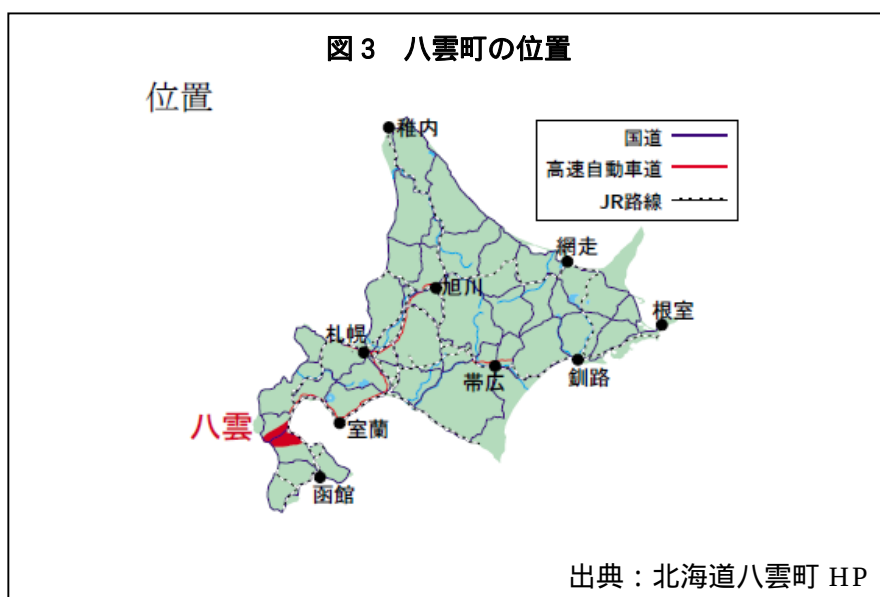
1.3 歷史

旧八雲町は開拓の祖、旧尾張藩主徳川慶勝侯が北海道開拓と併せて旧臣授産のため、遊樂部の土地の下付を願い出て 1878 年、家族持 15 戸、単身者 10 名、総人員 72 名を移住させたことから本格的に開拓が進められた。これが、八雲町の組織的団体移住者の始まりであった。その後年々移住する戸数が増加して 1881 年黒岩とともに独立して八雲村となった。1960 年、有史以来最も多くの人口 1 万有余人を数え、1962 年には町制施行となり、高齢化や過疎化が進む中で、地域活性化のために農漁業の基盤整備や平地区の開発等が進められてきた。平成 17 年 10 月 1 日、旧八雲町と檜山管内の旧熊石町が合併を実現した新八雲町が誕生し日本で唯一、太平洋と日本海を持つ町となった。

2. 八雲町の位置、気候

2.1 位置

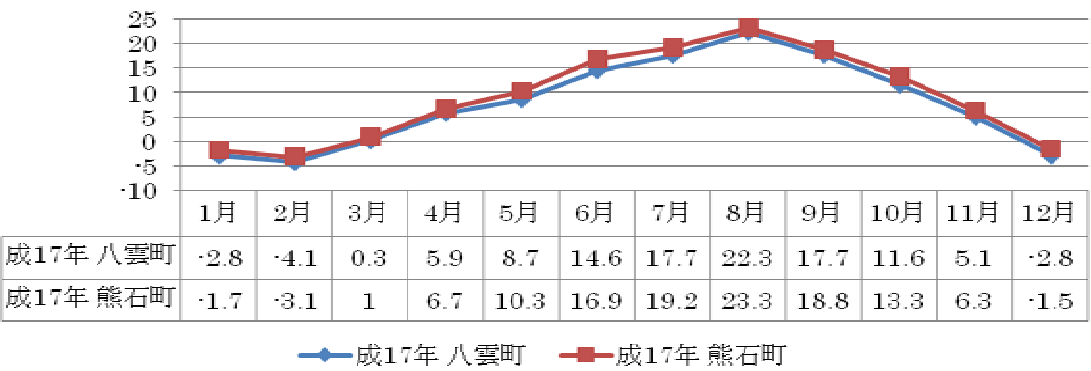
八雲町は、八雲町は北海道渡島半島の北部、北海道南部の拠点都市函館市と全道有数の重工業都市室蘭市の間、東経 140 度 27 分、北緯 42 度 25 分に位置している。東は内浦湾（噴火湾）、西は日本海に面し、北は今金町、せたな町、長万部町南は乙部町、厚沢部町、森町と接している。日本で唯一の太平洋と日本海に面している町である。面積 955.58K m²で渡島支庁管内最大の面積をもつ。北海道南部の交通の要衝で、幹線道路として国道 3 路線があり函館市と札幌を結ぶ 5 号、太平洋と日本海を最短距離で横断する 277 号、日本海側の幹線道路である 229 号が走り、北海道の大動脈となっている。また、国道 5 号と平行して JR 函館本線が通り、青函トンネルによってダイレクトに本州と結ばれている。さらに、道央自動車道の整備が進み八雲 IC は平成 18 年頃完成予定となっているほか、北海道新幹線整備の計画もあり、町は陸上交通の要衝となっている。



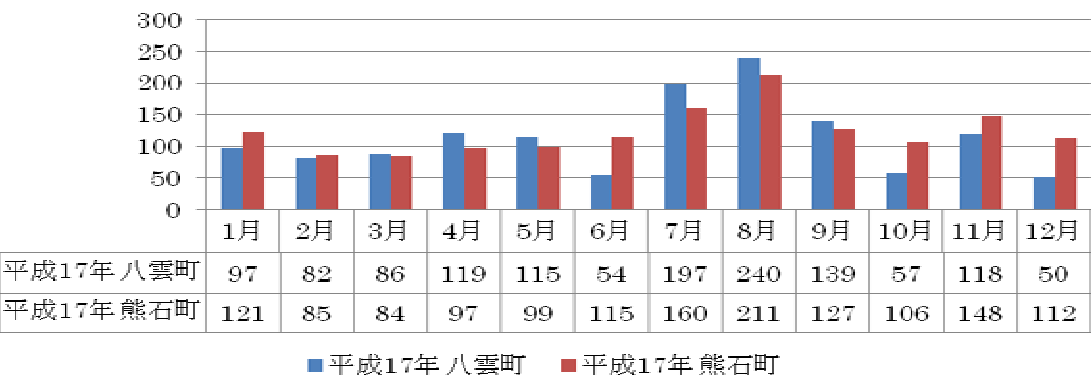
2.2 気候

温暖な気候であるが、気候は太平洋側（八雲地区）と日本海側（熊石地区）で異なり、太平洋側が年平均気温 7.9 、暖流の影響を受ける日本海側が年平均気温 9.1 となっている。また、降水量は、日本海側が冬に多く、夏に少なくなるのに対して、太平洋側では夏に多く、冬に少なくなる傾向が見られる。また、海洋性気候のため夏期に霧が発生することがある。

グラフ1 月別平均気温（℃）



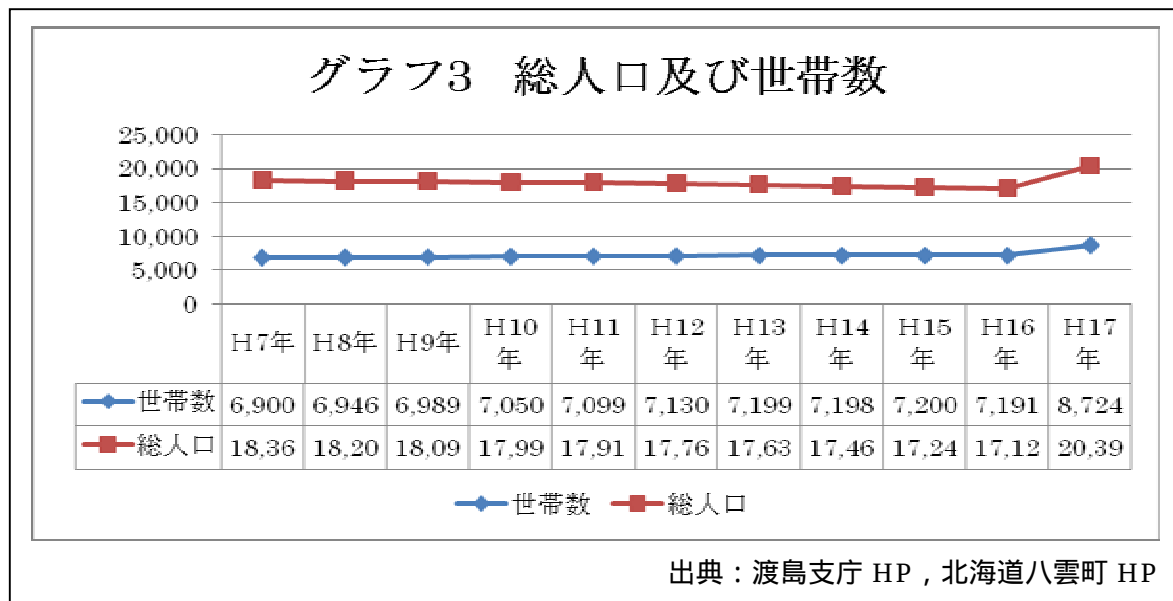
グラフ2 月別平均降水量（mm）



出典：北海道八雲町 HP

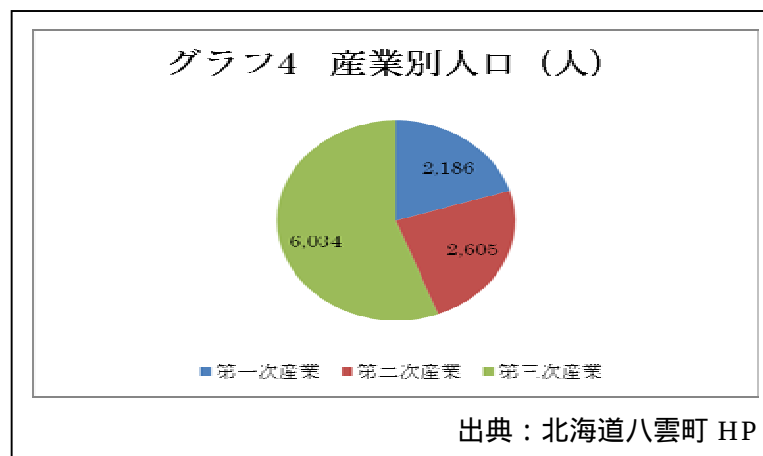
3. 八雲町の人口動態、世帯数

市町村合併と同時に行われた平成 17 年 10 月 1 日の国勢調査では、八雲町の人口は 20398 人、世帯数は平成 19 年 3 月 31 日現在で、8650 世帯となっている。



八雲町の人口は、近年ほぼ横ばいに推移してきた。平成 17 年に熊石地区と合併したため、平成 17 年の総人口データは増加しているが、その後は減少傾向にある。そのため、急速に少子化と高齢化が進行している。課題として女性が働きながら子育てが出来る環境をもっと整備していくこと、高齢者が安心して暮らせる社会体制の確立が必要であろう。

4. 産業と産業別人口



グラフより、第三次産業が最も多いことがわかる。次いで、第二次産業、第一次産業と続いている。第一次産業従事者は約時代の流れとともに徐々に減少し続けている。逆に第三次産業従事者の割合は年々増加傾向にある。八雲は昔から農業のさかんな地域であるので農業の衰退がこれ以上進まないように、農家の保護・育成、後継者の育成が今後の課題になるであろう。

4.1 農業

表2
主要家畜飼養状況（平成17年）

牛	乳用	10,300
	肉用	1,280
馬	農用馬	26
	軽種馬	2
豚		25,949
にわとり		2,992
めんよう		12

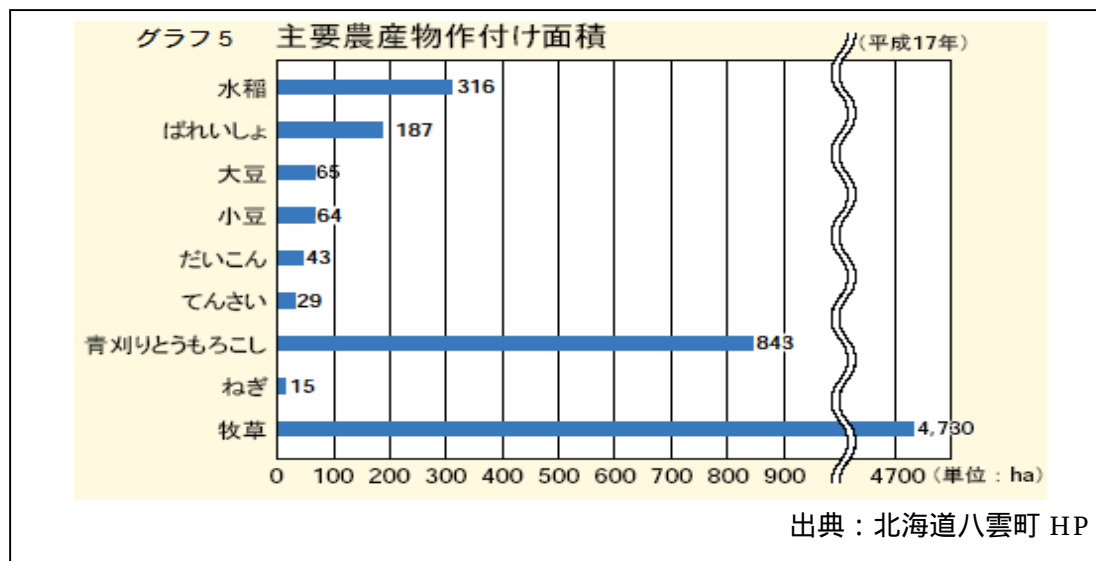
単位：頭

出典：北海道八雲町 HP

八雲町の農業は、八雲地区と熊石地区で全く異なっている。主に、八雲地区では酪農、熊石地区では畑作と稲作が行われている。八雲町の専業農家率は、61.36%と高く、道南地方を代表する農業地帯として知られている。近年は花卉栽培やハウス園芸が進展しているほか、温泉熱や海洋深層水の農業への活用がすすむなど、多様な営農が取り組まれている。



八雲地区の農業は、『ヤマセ』や『海霧』などの気象条件や火山性土壌であることから冷涼な気候を好む酪農を基幹としている。西洋農法を積極的に取り入れたため北海道酪農の発祥地と呼ばれている。乳牛頭数1万頭、生乳生産4万5千トンと道南随一の酪農郷である。酪農としては平均経営面積は小さいが、経営者の感性に合わせフリーストールや放牧飼育、また乳牛に快適な畜舎改造などさまざまな形態がとられている。近年は徐々に育成と搾乳の部門専門化により経営の効率化が進んでいる。飼料（エサ）は、牧草と栄養価の高いデントコーンを組合せ良質乳生産を行っている。

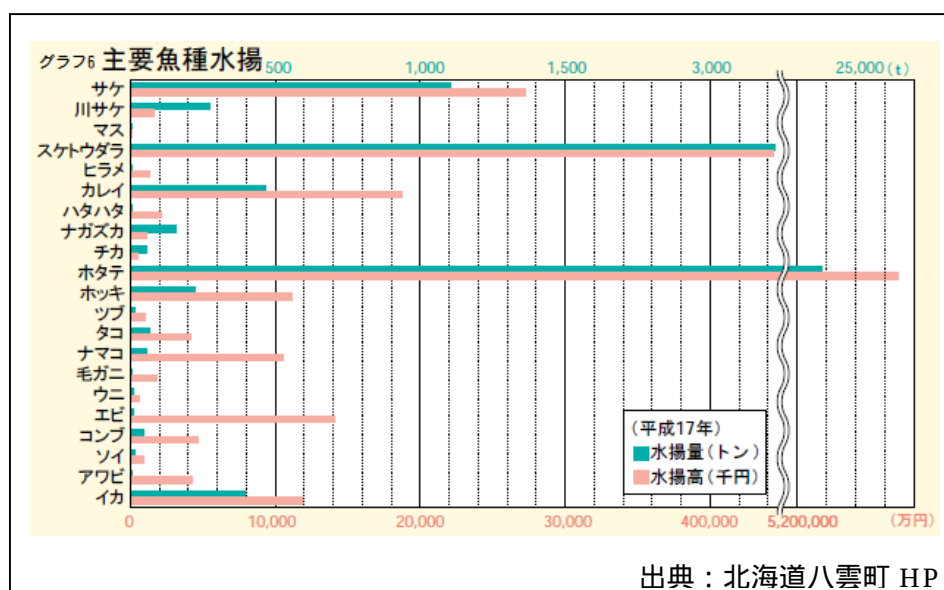


熊石地区の農業は、温暖な気候のもと耕地面積が少ないながらも水田・畑作等の複合経営を基幹としている。

畑作は、馬鈴薯を主として露地ネギ、大根、小豆など多様な作物が作られている。酪農の複合作物として取り入れられた馬鈴薯は、現在は種子用（八雲で作られている馬鈴しょは、他の産地の種いもとして利用されている）がほとんどのため、直接食卓に上るのはわずかではあるが、八雲農業の重要な作物の一つである。

稲作は、ピーク時には 1000ha 以上あった水田も生産調整（減反）の影響で現在では 280ha 程になった。平成 10 年度から“モチ米団地”として全水田にモチ米の「風の子モチ」を作付けしており、白く弾力性のあるモチ米として市場からの引き合いも多い。

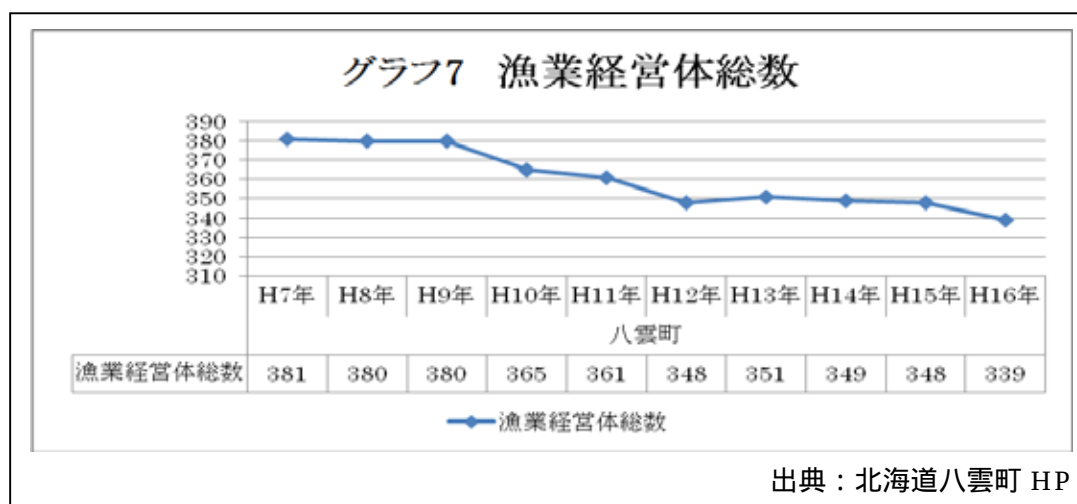
4.2 漁業



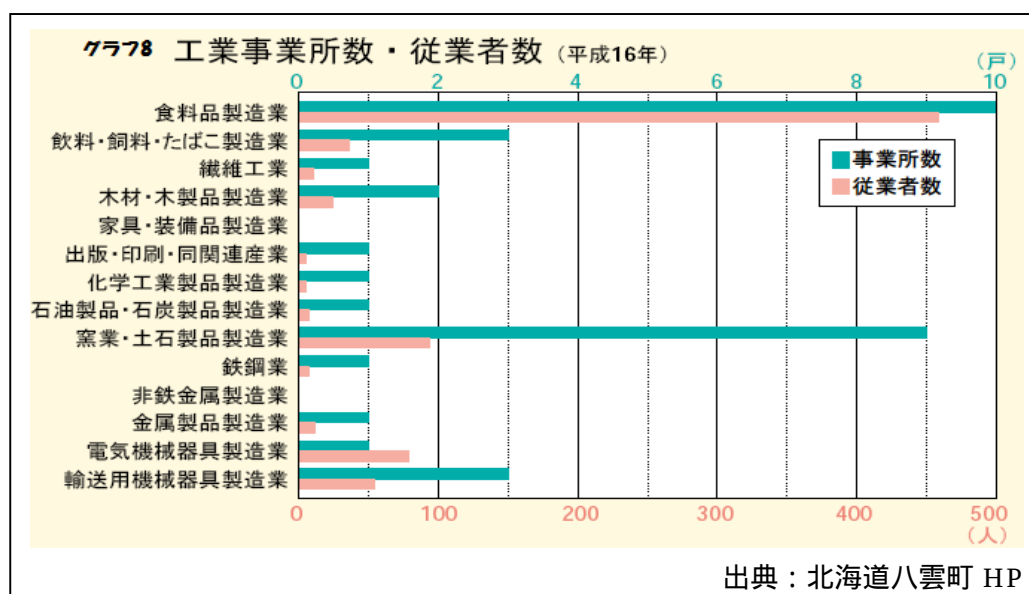
八雲地域では、天然の養魚池と言われる噴火湾の水産資源の豊かさを背景に、ホタテを中心とした栽培漁業のほか、名種漁船漁業が行われている。全国的に採る漁業から育てる漁業への転換が求められる中で、八雲町では内浦湾のホタテ養殖、日本海のアワビ養殖と、全国に誇る養殖漁業を行っている。

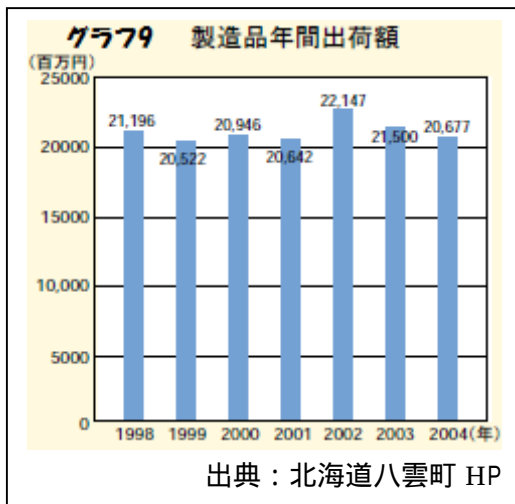
アワビの養殖については、熊石地域には北海道栽培漁業振興公社熊石事業所と、町水産種苗センターの 2 つのアワビの種苗生産・育成施設があり、温泉熱と海洋深層水の利用をはかりながら、採卵から成貝までの一貫体制が確立している。八雲地域のホタテの養殖は、昭和 40 年代から始まり、垂下式という独自の養殖技法を確立し、現在、八雲町の漁業生産 70 億の 8 割がホタテ養殖が占める、日本を代表する産地となっている。

しかし、その漁業も年々経営体数が減少している。早急に漁業経営体の保護体制を確立していかなければならないだろう。



4.3 工業





八雲地域の工業生産高は約 200 億円と函館圏に次ぐ商工業の集積地となっている。主力となっているのが食品加工業で、長谷川水産、服部醸造など、この分野では北海道を代表する企業が操業している。また誘致企業には、日本ハム系列の日本フードパッカー、IT 産業のルネサス北日本セミコンダクタ、ヤマハ系列の造船業のヤマキ船舶化工などがある。

マルハチ味噌で知られている服部醸造は、昭和2年に八雲町で創業。道産大豆と道産米を原料とした味噌、醤油、めんつゆなどを製造し、味

の良さで全国にファンをもつ。日本フードパッカーは国内食肉業界最大手の日本ハムの関連会社で、国内5か所にある工場のうち、肉の処理・加工を行う道南工場が八雲町にある。ルネサス北日本セミコンダクタは日立製作所と三菱電機の半導体部門の事業統合によって誕生した「株式会社ルネサステクノロジ」の関連会社で半導体集積回路の設計・製造を行っている。

5. 文化

5.1 木彫り熊の発祥

図 4 木彫り熊 1 号（右）と手本となったスイスの熊の木彫（左）



出典：北海道八雲町 HP

歴代の徳川家当主の中でも徳川義親は、八雲の発展に情熱を注いだ。北海道の代表的な土産品である熊の木彫りは、義親が、冬期間雪に閉ざされる八雲農場を思い、スイスから

もたらしたものである。大正 10 年ヨーロッパを旅行した義親は、スイスの農民が冬に木彫りの土産品をつくっている姿を見て、八雲にも広めようと、日本画家の十倉兼行や伊藤政雄を指導者にして、普及を図った。この時、義親は「とにかく作ってみる。できたものはすべて買い上げる」と宣言したと伝えられている。

5.2 八雲片栗粉

図 5 八雲片栗粉



出典：北海道八雲町 HP

明治後半に世界を席卷した八雲片栗粉も、八雲の新進の気風が産んだ歴史の産物であった。開拓使は、自給作物として馬鈴薯の作付けを奨励し、八雲でも盛んに作付けが行われた。しかし、当時は馬鈴薯の貯蔵技術が未発達で、腐らないうちにデンプンなどに加工しなければならなかったが、この当時、デンプン製造技術は未熟だった。明治 29 年、八雲町の川口良昌が画期的なデンプン製造装置を開発した。明治 38 年ころまで東京市場において第 1 位を占めていた千葉県産のでん

ぷんを制圧し、明治 40 年には早くも全国第 1 位の高値で取り引きされるようになった。これにより八雲はデンプン製造の中心地となり、「八雲片栗粉」のブランドは日本一を誇るようになった。デンプン製造は、第 1 次大戦後の市況の変化で下火になるものの、先進の気風と創意工夫の精神は、長く八雲の地に受け継がれていった。

5.3 八雲のスポーツ

図 6 スポンジテニス



出典：北海道八雲町 HP

スポンジテニスは平成 8 年に八雲町で誕生したニューファミリースポーツである。お年寄りから子どもまで手軽に楽しめる生涯スポーツとして普及している。ルールは普通のテニスと変わらないのだが、コートはバドミントンのコート、テニスボールはスポンジでできており、ラケットが短いのが特徴である。10 月にはスポンジテニスの全道大会が行われなど、北海道のスポンジテニスの中心地といってもいいだろう。

図 7 八雲ミルクロードレース



出典：北海道八雲町 HP

八雲ミルクロードレースは平成 18 年で 21 回を数えるハーフマラソンで、牧場を結ぶミルクロードを走る。10km、5km、2km とコースも 3 種類ある。表彰式が終わった後はお楽しみ大抽選会が行われる。多くの人々が参加し、毎年大いに盛り上がり、町の活性化に一役買っている。

6. 観光

図 8 八雲山車行列



出典：八雲山車行列 HP

北海道 3 大あんどん祭りの 1 つに数えられている八雲山車行列。その歴史は 1979 年に、青年団体・サークル（23 団体）が集まり第 1 回「若人の集い」実行委員会を結成し、「広げよう青年の輪を！」をテーマに前夜祭・本祭・スポーツ交流等を開催した。その中で、本祭をより多くの町民に PR するため、あんどん型の山車 4 台を製作し、リヤカーに乗せて町を練り歩いたのが始まりである。次の年、人出も多い 6 月の八雲まつりに合わせ、農家から古い馬車を譲り受け、それを台車に 9 台の山車が練り歩き町民に「若人の集い」を PR した。この反響をもとに山車プロジェクトを結成し、100 円カンパの取り組み等を通じ、町民と一体となった山車行列へ発展、町のあらたなイベントとなり、1986 年には山車の基本構想「祭りの創造」を策定、今後の展望を示した。1987 年より「山車行列実行委員会」を結成し、多くの町民が主体的に参加できる体制づくりを進め、また「おはやし」や「太鼓」等あらたな郷土芸能の創作を行っている。

今では毎年、20 数台の山車が参加して、八雲での暑い夏を彩り、2 日間で延べ 3 万人の観衆から盛んな声援を受ける。山車行列は、毎年 7 月の第 1 金曜・土曜日に町内のメインストリートを練り歩く。

資料 1 . その他のイベント

図 9 さむいべやまつり



10 数基の大雪像が並び、小雪像が彩りを添え、無料サービスのバザーの外、雪合戦やスノーモービル列車、雪上カヌーの試乗など厳しい冬の日を大いに楽しめる。

図 10 さらんべ公園桜まつり



鮭のふるさと”ユーラップ川”の河畔にあるさらんべ公園の満開の桜の下でジンギスカン鍋に舌鼓をうち、歌謡ショー、中学生のプラスバンド演奏などの行事が行われる。

図 11 落部公園つつじ祭り



5 千本のツツジで赤く染まる落部公園で開かれる春祭りで、歌謡ショーやジャンボビンゴ大会やクイズ大会、特産品の販売などが行われる。

図 12 八雲神社例大祭（歩行者天国）



八雲神社は、旧尾張藩主徳川慶勝が八雲に農場を開いた際に、故郷の熱田神宮神符と尾張徳川家歴代の神霊を祭ったのがはじまりで、明治 20 年に全国で唯一の熱田神宮の分社となっている。毎年 6 月に例大祭が行われている。本町商店街を歩行者天国にし、各種催し物が行われる。

図 13 やくも牧場まつり



酪農の町八雲ならではのイベント。牧草ロールジャングルジム、ニワトリレース、野菜重量当てクイズなどなど農業にちなんだ楽しいイベントが盛りたくさん。また噴火湾が一望できる絶好のロケーションの中、八雲産牛肉のステーキ、焼き肉を食べられる。イベント、飲食ともに手ぶらで行っても楽しめる内容となっており、会場は家族連れで賑わう。

図 14 納涼ユーラップ花火大会



古くから町民に親しまれてきた遊楽部川を背景に夏の夜空を彩る中国花火などの仕掛け花火が楽しめる花火大会。約 1,000 発の花火と、各種イベントやビアガーデンで賑わう。

図 15 やくも大漁秋味まつり



八雲町漁協主催で八雲漁港を会場に、サケのつかみ取りや鮭の超安値売り、サケ山漬け・ホタテ・ホッキなど地元特産品即売会など八雲の秋を味わえる。

(以上出典：やくも観光ステーション HP)

参照ホームページ

北海道八雲町：<http://www.town.yakumo.lg.jp/>

やくも観光ステーション：

<http://www.town.yakumo.lg.jp/pr/shouko/sightseeing/default.htm>

八雲山車行列：<http://www.town.yakumo.lg.jp/dashi/>

渡島支庁 HP：<http://www.oshima.pref.hokkaido.lg.jp/index.html>